

## 充員召集令状

福島県 荒家清隆

真夜中「今晚は」の声に何事かと母が起き、玄関を開けると弓張り提灯を持った役場の人が「清隆さんへ動員令です」という。なるほど赤い色の紙に充員召集と印刷されている。赤紙とはこのことかと初めて知る。よく見ると「昭和十二年九月七日十時、歩兵第三十連隊留守隊に入隊すべし」とある。

数日後、三十連隊の営門を通る。身体検査も異常なし。野戦瓦斯第五中隊に無事入隊できた。編成が終了したのから順に、雪中演習場へゆき被服の支給を受ける。行ってみると現役当時、歩兵七十四連隊の同じく毒ガス教育を受けた仲間が七人ほどいた。

我が部隊は、一個分隊が歩兵一五人、輜重兵五人、馬五頭（車両五台）である。これが三個分隊で一個小隊、また三個小隊で一個中隊である。それに輜重段列兵五〇、

馬五〇、車五〇で、日本最初の化学部隊だと聞いている。

翌日、習志野学校より教官として大尉殿ほか助教、助手の方が来られて、実際に毒ガスの使用についての教育を受けることになった。練兵場の一晚奥に集合、緑、黄、赤の順に実験した。現役当時は、瓦斯講堂ではんの数分間の経験をしただけであったが、今度はガス隊なのだ。何でもひと通り経験しなくてはならないのだ。イペリットやルイサイトという、ほんもののビラン性ガスは初めてである。今でもリングの腐ったような臭いだったのを覚えている。最後に防毒面を着用して、サラシ粉を多量に使い消毒をして、縄張りをしてきた。こんな教育が二、三回繰り返された。

教育を終えた我が五中隊は大隊本部と同一行動をとり神戸へ向かった。神戸を出航して三、四日すぎたころ、今まで青々としていた海が夜明けと共に黄色に変わってきた。船員に聞くと揚子江河口だとのことで、上陸は上海だった。

上陸後四日目に出発。今日から毎日、夜行軍とのことだ。自分は兵二人をもって金庫監守を命ぜられた。金庫

といつても軍用行李だ。金はともかく、重要書類が入っている。敵襲などのときは死守せねばならない重要な任務なのだ。

一週間ほどたったころ第五中隊より「混成一箇小隊を編成し南京攻撃に参加すべし」と命令があった。私は一番に志願し、後を追ってわれもわれもと志願者があり、たちまち編成が完了した。本部のトラックに飛び乗り出発した。始めは順調にスピードも出たが次第に進まなくなった。車両部隊で混雑しているのだ。馬や敵兵の死体がゴロゴロしており、次第に砲声も大きくなる。だんだん大砲の炸裂する音が聞こえてくる。そのうち南京の中山門へ向かうということが分かった。しかし、ほどなく南京が落ちたとの話が伝わり、折角ここまで来たのに南京攻略に参加できず残念であった。

一月も下旬に近づいたころ、我が部隊に「第十三師団長の指揮下に入るべし」と命令があった。部隊は、南京の中華門を通り下関に出た。さすが首都であると驚いた。あの城壁の立派なものにもびっくりした。下関より小舟大発(で)対岸の浦口へと渡る。三日後、目的地の除県に到

着し、第十三師団長、荻州中将殿の訓示があり指揮下に入る。私物をまとめ輜重に積み、明光へと急進する。次第に砲声が近づく。野戦病院の近くで背のうを除き軽装となった。

ここからは我ら歩兵のみの前進だ。鉄橋を目標に進む。機関銃弾が飛んでくる。各分隊が散開して前進、ようやく堤防へたどりつく。川幅は三〇呎ぐらいだが、深く流れが早い。ここで工兵隊の小舟に乗り渡河作戦だ。物凄い弾丸がくる。舟底に伏せて対岸へ上陸できた。堤防の内側を鉄橋の方へ進む。先に第一六中隊が到着していた。一六中隊に攻撃命令が出た。「突撃、進め」と、立ち上がったばかりで古池中隊長以下五人が戦死した。今度は本部の板垣小隊の率いるテナカ砲の攻撃直後、「第五中隊第一小隊が突撃すべし」と命令が出た。テナカ弾の炸裂にて敵兵があわてているところに、我々が突撃に成功した。突く、撃つ、なぐるなど健闘した。その時トーチカ二基を占領した。トーチカの後方に回り入口に行ったところ、外側からカギをかけ出られぬようになっていた。あれでは必死に抵抗しなくてはならないはずで、我が中

隊でも戦死七人、負傷十数人を出したと聞く。

その後、前進また前進して約一〇〇〇呎ぐらい進んだ。逃げ遅れた敵も相当いたので撃滅した。

翌日の昼近く、「ガス隊は明光に集結せよ」の命令により最前線を後にした。昨日、背のうを置いた民家に泊まることになり、夕食を済ませた。午前二時ごろ寝ようとしたら全員起床。「二食分の飯盒炊飯をせよ」とのこととで、全員準備する。約一時間で終わったころ、中隊長命令。「荒家上等兵は兵五人をもって敵偵察に出よ」とあった。直ぐ準備、隊長の所へ行く。小隊長もおられた。「我が部隊は、今百十六連隊第三大隊が苦戦しているので救援に向かうが、位置が不明だ。また敵味方が入り乱れているから、気をつけていくように」と言われ、方向はアチラだと地図を見て指をさす。地図を見ると、小高い丘を三つほど越えなければならぬ。「よし、それでは行ってきます」と出発した。

夜が白々と明けるころ、壕の中に兵がいるのが見えた。早速近づいて尋ねたところ、大きな壕の奥の方で「おれが佐伯だ」との声が聞こえた。私はハッとし、捧げ銃の

敬礼をして「只今野戦ガス隊が救援に参ります」と申し上げますと、さすが陸軍少佐殿も嬉しそうであった。

「只今から本隊へ連絡に行つて参ります」と、二班に分かれて急いだ。約一時間ぐらい後方へ進んだ所で、我が中隊と出会い報告をすると、「苦勞」とねぎらわれた。

ただちに、私が先頭になり壕の中の大隊長の所へ急ぎとつて返す。「只今到着しました」と報告する。大隊長と中隊長は初顔合わせで、しばらく打ち合わせが続いた。そのうち大隊より出た斥候が戻り、我が部隊は「右第一線に進出すべし」との命令が出た。まず第一小隊が丘へ出ようとしたら前面から猛射を浴びる。我が部隊に機関銃があつたらなと思う。我が軍は全員第一線に出て撃ちまくった。そのすきに第一小隊が突撃した。第一線に出てみると敵兵の姿は見えない。しかし敵弾はますます激しくなる。

よく見ると無数のトーチカからの射撃であつた。我らも体を横にして、エンビで身体が横になれるぐらいの穴を掘つて、次の命令を待つ。そこへ第二、第三小隊も進撃してきた。

私はこのままでは危ないと思ひ、トーチカの死角に出た。後を見ると死傷者多数である。そのうち「小隊は前方の集落を占領せよ」との命令が出る。他部隊に援護射撃を頼む。全員が静かに稜線に出ると敵弾は雨あられと飛来する。我々も負けずに撃ちまくった。

そのうち分隊長が後より「荒家、前へ出る」の声。私も言われるまでもなく伏せて出た。その時、今まで見えなかった左前のトーチカより、無数に撃ち込んできた。あっと思ひ伏せたその時だ。突然背中に熱いものが走った。我を忘れて「あっ」と叫んだ。そして意識不明になった。どのくらい経ったか知らぬが、突撃のため進出して来た戦友が私を発見、「どうした、しっかりせよ」と大声をかけたので、私もハッと我に帰った。見れば右手首から血が流れている。私は民家で軍医の治療を受けた。その時、軍医は「この兵隊はこのままでは、出血多量でだめになる」と小隊長に話しておられた。

軍医の話では、もうちょっと上だと何でもなかった。また、もう少し下では田楽刺しだとのことであった。ああ死ぬも生きるも紙一重とは、このことかと、今までの

戦友の戦死、負傷者を思い浮かべた。そのうち、衛生兵と五人の兵が私を担架に乗せて出発した。途中、どこからともなく弾が飛んで来る。そのたびに道路の下へ皆が伏せる。そのうち夜も深まり、寒さが増したのか、「寒い、寒い」と言っていたそうです。幸い野戦病院も早く見つかり、軍医の診療を受けることができた。軍医殿は「肺に障りがあるようだ。絶対に安静にすべきだ」と申される。その時「君は大沼郡のどこだ」と申された。「新鶴村です」と答えると、「長谷川恒雄を知っているか」とのこと。よく考えてみると、五つ年上の村長さんの長男であることが分かったので、「はい存じております」と申し上げた。「そうか、おれはあれと医大同級生だ」と言っておられた。

また軍医殿は「おれは沼沢村の中川だ。お前の命は大丈夫だ。無理はするな」と言われた。病室では朝までに五人も死んでいった。

翌朝、衛生兵が来て「君は重傷患者なので別の室へ移す」と言ってお連れて行かれた。なるほどその病室はうなっている者ばかりだ。私は傷口が少し痛むくらいで大した

ことはない。三日目の朝、軍医殿が来られて、「後方へ移動することになった。ほかの病院へ行っても咯血したかと聞かれたら、ハイ、と言え。また量はと聞かれたら知らないと言え」と言って帰られた。

それから担架で運ばれ列車に乗った。数時間で除原に着いた。大勢の方はここで降りたが、私たちは浦口へ行き、舟で南京の下関に着いた。そこには白衣の天使というべき看護婦さんがたくさん、私たちの着くのを待っていてくれた。そこで、今度は兵站病院まで車で運ばれた。

病院について、軍医の診察を受けたとき、言われたとおり咯血のことを聞かれたので、「ハイ」と答え、どのぐらいかと申されたが、「夜でよく分からなかった」と申した。ここでも重傷患者扱いである。病室に入ると下着から全部着替えさせられたので、非常に心地よかった。

絶対安静といわれ毎日上げ膳下げ膳であった。そして一週間後、婦長さんが来て「あす上海の病院へ転送されることになった。この看護婦さんが上海まで付き添って下さるので安心して行くように」と言われた。

翌朝みんなにお別れして車で港へ行く。ここからは捕

獲船を改造した病院船に乗った。風もなく、流れも静かで、快晴の旅である。看護婦さんたちも息抜きができると喜んでいた。夜は我々とトランプをしたり、流行歌を歌ったりして、次第に別れがつかくなるような気がした。

三日目、上海の兵站病院へ着いた。ここでも重傷患者扱いであった。真夜中になって背中が痛むので傷口が化膿したものと思い、翌朝診察を受けた。軍医はこれは化膿ではない。弾が入っているのだとのこと。早速手術をするようになった。

現在の医術と違い、あのころの野戦での手術だから荒っぽい。局部に注射一本して「看護婦四、五人でしっかり押さえている」と言うが早いか、メスがブスリ。痛いという暇もなく切り開かれた。軍医は手袋をはめ指先で弾を捜し始めた。そのうち「ほら弾だ」と取り出した。チェコ機関銃弾であった。射入口より、同時に二弾が入り、一弾は射出口より抜けたが、もう一弾はどうしたところか体内に残った。傷口が治るに従い、新しい肉のため、押し出されたのだと聞いた。これが砲弾の破片なれば出ないと申された。

上海病院にて桐箱に入った恩賜の繻帯と恩賜のタバコ  
一〇本入り一箱が下賜された。傷も治り痛みがないので  
内地送還となった。病院船ミツホ丸で帰還した。軍司令  
官、松井石根閣下が、畑閣下と交代され、同じ船に乗っ  
ておられた。途中、大阪港にて松井閣下と関西の患者を  
降ろし、東京へ直行した。

私たちは芝浦港で上陸、盛大な歓迎を受けながら牛込  
第一陸軍病院に入り、日一日と快方に向かった。野戦病  
院に長く置かれたら、これほど早く全治しなかったと思  
う。戦後、中川軍医宅へお礼にいった。

## 湖南省における悪戦苦闘記

奈良県 川本 義徳

オッサンに召集令状がきた

昭和十八年七月二十一日の正午ちょうど、昼食時に家  
内と今度出産する子供の話の最中に、役場の吏員が赤紙

(召集令状)を持ってきた。

堺市の第二十五部隊に無事入隊、そして七月二十八日  
最後の面会、翌二十九日夜行特別軍用列車で九州博多へ、  
翌三十日夜わが祖国日本を後に博多港から関門海峡をわ  
たり、さらに玄海の荒波を越え、朝鮮の釜山港に上陸、  
そして北鮮經由で大連へ。

二日後に南満州鉄道にて北上、満州国虎林駅に到着。  
ここで大東亜戦争急を告げる北満国境警備の任についた  
のである。これがわが独立輜重兵第五十四部隊(通称六  
〇〇〇部隊)の第二中隊の一兵士として軍隊生活が始ま  
るのである。

満州の軍隊生活に慣れたころ、わが独立輜重兵の六〇  
〇〇部隊に大移動命令が下った。早速準備完了して、南  
満州鉄道で南下、あの有名な万里の長城を望みながら山  
海関を過ぎ、数日後、旧首都南京に到着した。

そして揚子江南岸の無湖で下車し、一時駐屯して以後  
の作戦行動の準備に追われた。一週間ほどして無湖から  
当面の目的地の武昌まで長江沿いに約八〇〇<sup>キ</sup>の行程を  
馬匹編成して、毎日露宮を重ね、泥濘と悪路に悩まされ、  
途中は大した事故もなかったが苦しい長い長い挽馬大行